



山口県本部版

NO. 312

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟

山口県本部

〒754-0004

山口市小郡金堀町

21番の1

林洋武方

電話&FAX

083 (972) 3987

【写真】 昨年の国賠同盟中国ブロック交流会

山口県下関市“海峡ビュー下関”で開催

今年は島根県松江市で10月14日~15日

◆国賠同盟今年の中国ブロック交流会について

中国ブロック活動交流集会IN松江

日時 10月14日(月・休日)13時~15日12時

場所 松江市殿町 むらくも会館

参加費 15,000円(宿泊、夕食懇親会含む)

記念講演

①加藤ユリ氏(国賠同盟埼玉県委員長)

演題『わが父・金森臣隆と私の人生』

②前田賢龍氏(益田市専龍寺住職)

演題『治安維持法と宗教』

山口市から車の乗り合わせで参加します。

◆同盟の第33回全国女性交流集会は、11月10日(日)~

11日、愛知県蒲郡温泉郷のホテル竹島で開かれます。

◆同盟山口県本部総会を9月18日(水)午後1時30分よ

り共産党県委員会会議室で行います。

◆同盟の国賠国会請願署名は8月末で52筆です。

◆同盟の推薦書籍

◇『治安維持法とは何か』 頒価 500円

◇『治安維持法と現代』2024年春季号頒価1000円

◇『第32回全国女性交流集会報告集』 頒価 800円

◇『告発 戦後の特高官僚』 頒価1714円

◇『時代の証言者 伊藤千代子』 頒価1600円

今も生きている河上肇の足跡

その6

河上肇記念会全国世話人 加藤碩(ひろし)

「私がわからない女だと云って怒鳴ったものだから、家内は悲しいとも情けないとも言ひようのない顔付きをして泣き出した。私は今でもその泣顔を忘れることが出来ずに居るが、それ以来、大学教授時代の細君と比べると、とても比較にならぬほど並々ならぬ苦勞を見せることになったので、愈々死ぬるといふ時には、長く世話になったと礼を言つて、一生の幕を閉じたいと、常々思っているのである。」(同)

本当にヒューマンな愛する奥さんへの心からのエールだと思えます。

結局河上肇が書齋を棄てて実践に踏み出した特徴を二つほどにまとめてみたいと思ます。第一は、科学的真理に対す

る徹底した探究心と、一旦到達した真理にたいしては、それに非常に忠実に従つて、間髪を入れない実践への一步を踏み出してこられたことです。一徹な態度を絶対にくずさないわけです。

第二は、うそがないことです。自分が到達したと確信していた真理であつても、間違ひだとかわかつたら、ただちに引き下がる。先ほども言いましたように、自分の躊躇や逡巡も正直に、みんなの前でオープンにしている性格です。

この二点は、私たちが今後さまざまな運動を進めていく上でも学ぶべき優れた資質だと思ひます。

京都帝大を辞職して、実践に踏み込んでからも河上肇の理

論的研鑽は、学界や論壇からは少し離れていましたが、間断なく進んでおりました。当時の日本の大衆的理論誌としては、最も権威があつたと見てよい「中央公論」という雑誌の一九三一年九月号に河上は、長文の論文を寄せています。肇氏の弟さんになる左京さんに、澆刺とした手紙で書き送っている一文があります。「地代論に関する諸氏の論争」という論文です。「資本論」第三部の「地代」の章にかかわつた論争です。猪俣&高田(保馬。京都大学の非マルクス経済学者)論争、榎田民蔵&向坂逸郎論争、榎田民蔵とは婦人運動の重鎮であつた榎田ふきさんのご主人です。向坂逸郎氏は『資本論』の翻訳でも知られている九州大学教授です。この論争に河上肇は割つて入っているわけです。

しばらく勉強から離れているので、この論文を書くのには

大変に骨が折れ、時間が掛かりましたが、その代わり仕上げたアトはユカイです。と書いた後に「マルクス主義を標榜している連中が、いずれもなつていないのに驚くと同時に、久しく純理の問題から遠ざかつていて、その間にどれほど皆な進歩しているかと内々おそれを抱いていたのですが、大いに自信を得ました。ヤハリ俺が図抜けてよく知っているナといふ自惚れを持ちました。榎田は深く深く一刀きりさげ、アト軽く一、二刀。向坂は一刀で即死。猪俣は完膚なきまでに十数創。この勢いを見て高田は青くなつて気絶。そこを一刀バサリ。之を『昭和四人斬』と自分で名づけています。問題が非常に込み入つた理論なので、第三者にはわかりますまいが、実に快刀乱麻をたつ調子に出来たつもりです。これで気分が引き立って元氣です。一寸疲れて一日二日休

養しましたが、これからまた新たな問題をやります。仕事は山ほどあります。そしてまた脳髓が衰えてはいないことが証明されたので、チヨとユカイです。先は自慢話まで。」

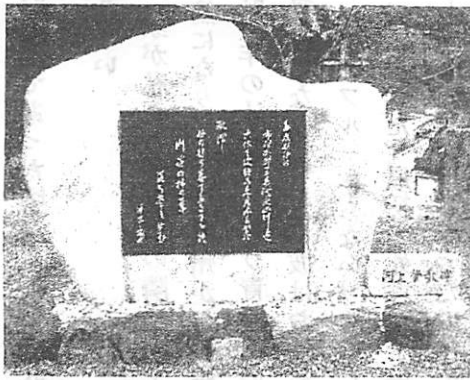
この論争については、現在でも著名な「経済学辞典」にはほとんどその項目がある有名な論争です。野呂栄太郎の「日本資本主義発達史講座」のなかでも大きなテーマとなっていた議論です。

たどりつき

ふりかえりみれば……

——日本共産党への入党

日本共産党への入党というところへ話をすすめます。「求道家としての河上肇」のところでお話ししましたように、錦帯橋の河畔の歌碑の「たどりつきふりかえりみれば やまかはをこえてはこえてきつるものかな」の一首は、日本共産党への入党に際して詠まれたもの



錦帯橋畔にある河上肇歌碑（1997年建立）

でした。一九三二年八月十三日です。河上肇五十三歳の時でした。

河上肇さんは語学に堪能でしたから、コミンテルンから戦前の日本共産党の綱領的文書「三十二年テーゼ」というものが届けられるのですが、これを日本で最初に翻訳したのが、河上肇だと言われています。翻訳した文書を党にとどけたその功績も合わせて入党を認められたということではないかと思えます。その時は、すでにい

わゆる「地下に潜っている」という状況になっておりましたから、自分の入党の承認をほとんど誰にも伝えることが出来ない状況でしたが、自身の感慨深い喜びが、この歌には表されている、今日味わっても、本当にいい歌です。

入党は認められたのですが、その翌年の一月十二日に、アジトを嗅ぎ付けられて逮捕されます。五十四歳でした。権力側は、日本共産党は間違っている。共産党には組みしませんという趣旨の「転向声明」の発表まで強要しました。

河上肇と言えば、京都帝国大学の元教授。私には勲章や位のこととはよくわかりませんが、従四位勲三等というその時代の一級の知名士なんです。

この人物がマルクス経済学者であり、日本共産党員であるかもわからないという事実があたえた影響は、社会的には非

常に大きなものがあり、その人物を転向させればその影響はさらに強いということになりますから、権力側は必死になるわけですね。それであらゆる手を使ってさかんに転向を強いるためにモーションをかけてきます。

当時、検事であった戸沢という人物は河上の工作が容易にしやすいように、収監している刑務所まで変えて、現在の心境を文章にして提出してくれと迫ります。

それに対して河上肇は、これを書けば有罪は有罪になるかもしれないが執行猶予がつくのではないかと勝手に思い込んでしまつて、執筆を決心します。これさえ書けば、すぐに出版されるはずだと都合よく考えて承諾してしまうわけです。

(つづく)

私の戦争体験 北朝鮮の難民であった頃(9) 林洋武

続出する死者 墓場が足りない

満州から避難してきた一家が私たちの家族の隣にいました。そこのおばあさんが危篤になりました。満州からの避難民のなかに医科大学の最終学年の辻さんという青年がいました。彼が日本人会の「医者」役になりました。彼はおばあさんに付き添っていました。「カンフル一本もない。なにしろというのか」独り言を言っていました。最初の死者で子供達も無遠慮に見にきました。しかし死者が珍しかったのはそのおばあさんまででした。次々に死人が出始めました。順ちゃんのお父さんは敗戦前から結核で病んでいました。その子は三つでしたが父の結核がうつったのでしょう。二人とも間もなく亡くなりました。国民学校の校長先生夫人も二人の子を残して亡くなりました。栄養失調なると少し体調が落ちるとすぐ死に直結することを目の当たりにしました。カンフルという心臓強壯剤で死の直前に打つ注射であることも知りました。

順安ではそれまで日本人が亡くなるということは滅多ありませんでした。若い人が多かったことや病状が悪化すると日本に帰ってしまうからです。それでも、小さな日本人墓地が用意されていました。その墓地に死者を埋めに行くことに

なり兄たちがそれを担いました。狭い墓地には以前埋めた遺体の骨が出てくると兄たちは母に報告していました。私はその報告を聞いたたびにたまらなくなりました。死者は次々に出ました。寒くなると土が凍り「深く掘れないから浅く埋めた。犬やオオカミが遺体を持って行くかもしれない」と聞くだけで震え上がるほど恐ろしかった思いがあります。

父の逮捕 国民学校は閉鎖のまま

敗戦直後、わが家の庭に大きな穴を掘り連日書類や手紙特に写真が燃やされていました。特に写真は父の写真はすべて軍服姿でしたので丁寧に燃やされました。兄たちはその中に手投弾や迫撃砲の模造品で「たばこケース」と「花瓶」になったものもその穴に放り込みました。たくさんあったのですが金属回収でほとんど供出してしまつて二つだけ残していたものでした。私たちが収容所に入れられ後にわが家にはソ連軍の関係者が入居しました。その穴を掘り出し手投弾と迫撃砲の模造品を見つけました。「武器隠匿」で突如父が逮捕されました。在郷軍人会長で権勢を振るっていた父は目につけられていたこともあり郡庁の裁判まで連れ出されました。保安隊と交渉してくれた日本人会の役員は「林さんは生きて帰れないでしょう」と報告にきました。日本が敗戦になって国民学校は閉鎖になり子供達は放置されました。飢えた子供達は少しでもお腹の足しになるものを探していました。